

超高齢団地における介護・生活支援ニーズに関する研究： 住民の力を活かした生活支援に向けて

1. 研究の概要

都市部における少子高齢化の進行する団地では、孤立死、認知症への対応等多くの課題に直面している。高齢化の進行する超高齢団地（滝山団地）では、介護・生活支援ニーズを持つ要支援者が居住する一方、子育て世代や元気な高齢者も居住する。多様な住民が居住している団地の特性を生かしながら、認知症対策や要支援者のユーズに取り組むことが、地域包括ケアシステム構築のためにも不可欠である。そこで本研究では、高齢者に対する生活ニーズを把握するためのインタビュー調査の実施およびダイニングカフェ滝山における学生ボランティア活動をおこなった。

2. ダイニングカフェ滝山における学生ボランティア活動

滝山団地自治会は、平成 24 年度に「滝山あんしんつながりの家」を開設した。「滝山あんしんつながりの家」に設置されている「ダイニングカフェ滝山」は、気軽に会話ができる喫茶・軽食スペースとして団地内外の住民に利用されており、本学の学生グループ「滝ゆう」は、「ダイニングカフェ滝山」の開設当初から活動に関わっている。平成 28 年度は 32 日間、延べ 68 名の学部生や院生がボランティア活動をおこなった。

3. インタビュー調査の概要

（1）調査の概要

平成 27 年度に実施した滝山団地住民の生活支援に関するアンケート調査結果を踏まえ、インタビュー調査を実施した。具体的には、平成 27 年度に実施したアンケート調査において、生活支援および終活に関するインタビュー調査に対する協力者を募った。そしてその中から①要介護認定を受けているまたは障害者手帳がある、②健康状態が「悪い」と回答している、③外出頻度が少ない（週 1 回以下）のいずれかに該当した協力者から、改めて同意を得た。その結果、高齢者を中心に 10 名（男性 7 名、女性 3 名）に対してインタビュー調査を実施することができた。調査期間は平成 28 年 9 月から平成 29 年 1 月であり、平均年齢は 74.7 歳であった。

（2）倫理的配慮

インタビュー調査の日時が決定した後、インタビュー調査の概要およびプライバシー保護などに関する事項を記載した文書を郵送したほか、インタビュー実施の際に改めて口頭で説明し同意を得た。また、本調査に関しては本学倫理委員会の承認を得ている。

4. インタビュー調査の結果

10 名に対するインタビュー調査の結果は以下のとおりである。

（1）基本属性

【性別】

「男性」7名、「女性」3名であった。

【年齢】

「60代」3名、「70代」6名、「80代」1名であった。

【居住年数】

「20年未満」2名、「20年～30年未満」2名、「30～40年未満」1名、「40年以上」5名であった。

【住宅種別】

「分譲」8名、「賃貸」2名であった。

【自治会への加入】

「加入」6名、「未加入」4名であった。

【要介護認定】

本人については「要支援」2名、「なし」8名であった。家族が要支援または要介護状態である場合を含むと、「要支援」3名、「要介護」2名、「なし」5名であった。

(2) 生活について**【買い物】**

「自分でお店に行っている」9名、「家族がしている」1名であった。

【掃除】

「自分でできる」8名、「家族やヘルパーの手助けが必要」2名であった。

【通院】

「通院している」8名、「通院していない」2名であった。

【生活の困りごと】

「特になし」4名であった。その他については、「家族の体調」、「自身の健康」などが挙げられた。また、近隣の付き合いが無くどことなく閉鎖的であり、挨拶を返さないような人も多く寂しいという意見があった。その他、現在は困っていないものの、エレベーターが無い将来は階段昇降が困難になるのではないかと心配しているという意見や、グリーンボックスが撤去され不便になったという意見があった。

【頼りにする人】

「家事炊事」、「諸手続き」、「介護」に関しては「無し（困っていない）」が7名であった。「その他」については、「家族」「ヘルパー」「ケアマネージャー」が挙げられた。また、「体調不良時」に関しては「無し（困っていない）」4名であり、その他の6名は「家族」（母、夫、長男、長女、孫など）を挙げていた。

【住宅の困りごと】

「特になし」3名、「エレベーターの設置」3名であった。その他、「自身でリフォームを実施した（リビング、浴室、キッチン、トイレ等）」（2名）、「洗濯機の排水が不便」、「階下に与える騒音（近所づきあいの気兼ね）」などが挙げられた。また、建て替えの話が持ち上がっているが金銭的な負担があるという意見（2名）もあった。

(3) 近隣住民との交流について

【外出頻度及び外出先】

「毎日」9名、「2-3日に1回」1名であった。行き先については、団地内の散歩、買い物、通院、サークルなどが挙げられた。

【近隣住民と会う頻度】

「同じ階段または棟内での交流」（5名）、「団地内の仲間」（1名）が挙げられた。その他、「転居前の近隣」、「サークル仲間」、「交流が無い」等が挙げられた。

インタビュー調査では、居住歴が長い住民から、以前は団地内とりわけ同じ棟や階段における付き合いがあった様子や、現在も入居者同士の付き合いがある様子が語られた。

ここに越してきた頃は、4~5年は隣のうちに。コンビニなんかはなかったから、「ちょっとお砂糖なくなっちゃったんだけど」とか、「お塩がなくなったから貸して」とか、貸し借りはよくやっていました。(A氏・居住歴40年以上)

結局、この階段にいと、階段同士で時々その下の芝生の手入れをしたり、時々ありますんで。まあ月に1回ぐらいは何となく出てきて。要するに草取りだとか、そんなことですよ。会えばみんな40年来の付き合いだから。まあ、あっちが痛い、こっちが痛いってそんなことを。(B氏・居住歴40年以上)

お互いに、みんな大体古い人、みんな顔知ってますからね。「どう？」って。(C氏・居住歴40年以上)

一方、居住年数が短い場合は、同じ棟あるいは同じ階段の居住者同士の付き合いが少ない様子が伺われた。また、近隣住民よりも管理事務所を頼っているようであった。

この並びの階段の間の人には、うーん。それでも、もうこの1年半の間に、昨日会った人だって、2回目か3回目ですよ。(D氏・居住歴20年未満)

【近隣住民の助けを感じる時】

「特にない」が3名であった。「その他」は「自主防災組織での炊き出しやレクリエーション」、「畑で採れたもののおすそ分け」、「体調を悪くした際に食事のおすそ分け」、「ごみの出し方など生活上必要なことを教えてくれる人がいた」、「団地のルールなどを教えてもらった」などが挙げられた。また、「助けを感じる時は無いが、助けてあげることはある」、「自転車の有無で在室か不在かを確認し、声をかけている」という回答もあった。インタビュー調査では、団地内の声掛けや支え合いの必要性が語られた。

やっぱり、住み慣れたとこってというのは、「おはようございます」って言ったら、みんなが「ああ、どう？」って言って、声掛け合う。これがやっぱり、絶対、年取ったら必要だと思いますよね。(C氏・居住歴40年以上)

何かがあったときは、私もできる範囲でやっぱり手を貸してあげたいなとは思っていますね。(F氏・居住歴40年以上)

また、居住歴が比較的短い住民も、団地内の人間関係が浅いとはいえ、何らかの役割があれば喜んで協力するという気持ちを抱いていた。

(自治会などで人手不足の際に手伝うことについて) まだ体力もありますし、チャンスがあればいつでも協力しますという気持ちはもちろんあります。

(E氏・居住歴20年未満)

【近隣住民に頼みにくいこと】

「頼みにくい」3名、「頼まない」、「助けは必要ない」、「干渉したくない・されたくない」、「家族に頼んでいる」、「頼む関係にない」各1名であった。

【団地情報の入手先】

「管理組合からのお知らせ」4名、「自治会による団地の速報」4名のほか、「ポスティング」、「近所の人とお喋り」、「建築委員会の会報」、「防災委員会の会報」などが挙げられた。インタビュー調査では、管理組合に頼っている様子が語られた。

こちらでそういったこと(注:団地のこと)を相談する方はいないので。私は今、何かあると、(略)全部管理事務所にお聞きしています。(E氏・居住歴20年未満)

(4) 終活について

全員が「このまま住み続けたい」という希望を抱いていた。その一方で、「階段昇降が困難」になった際のことを考え、「エレベーターがある場所への転居」や「1階への移動」などを検討したことがあるという回答もあった。また、建物の耐用年数やエレベーター設置などについては費用負担の問題も挙げられた。最期を過ごしたい場所については、7名が「自宅」を希望していた。

5. 考察

約50年ほど前に建てられた滝山団地は、当時は団地内とりわけ同じ棟あるいは同じ階段における人付き合いの程度が現在より強かったようである。時代の変遷に伴い、人間関係が希薄化したと共に、例えば当時20代だった入居者は70代になった。階段昇降の身体への負担は、少なからず外出の頻度に影響を与えていると考えられる。インタビュー調査では、こうした状況を反映するかのように、同じ階段の住民と顔を合わせる機会が少ないという話が語られた。これは入居期間の長さを問わなかった。

団地に長期間住み続けている住民からは、入居当時に構築された近隣住民との関係が現在も続いている様子が伺えたが、その一方で、困った時に気軽に頼れる関係ではないようにも見受けられた。その理由の一つとして、現在は家族に頼ることができているという点が考えられた。しかし、現時点では家族の手助けがあるから近隣住民の助けは必要ないと

考えていても、いつまでも家族や親族に期待できるとは限らない。将来は、日常生活における小さな困りごとに対する手助けや緊急時の対応など、地域住民のサポートが必要になる可能性が無いとは言えない。時代の変化と共に団地内の状況も変化したと同時に、声をかけ合う関係や、いざという時に支え合える関係が求められていると考えられた。

本調査は10名という少人数に対するインタビューのため、住民の多くの意見を反映しているとは言えないが、以上のことから、団地内の人間関係の再構築が求められているのではないかと考えられた。現在、入居期間が長い住民は古くからの団地内の関係が保たれ、趣味の会などを通じたネットワークが構築されている。一方、入居期間が比較的短い入居者は関係性が構築されていないなど、団地内の人間関係の構築に違いが見られた。いずれも場合も、助けが必要な際には、近隣住民よりも家族や親族に頼っている状況が明らかになった。

団地内には、ウォーキングの会をはじめとする趣味の会や、自主防災組織がある。管理組合や団地自治会、そのほか各組織から発行される広報誌は、団地内の情報を入手する手段として挙げられることが多かった。また、ダイニングカフェ滝山は、団地内のみならず団地外からの利用があり、多様な人が交わり、情報交換がおこなわれる場になっている。本調査を通じて、団地内の各組織をはじめ、多様な人や情報が交わる場を設けることの重要性を再確認することができた。

また、インタビュー調査では、居住年数の長さに関わらず、何らかの役割があれば協力したいという声があった。こうしたことから、住民が活躍できる機会を提供すること、あるいは何らかの協力を求めている人と協力したい（協力できる）人をマッチングさせる場を設けることも必要ではないかと考えられた。

今後さらに、住民の力を活かした生活支援のあり方について研究を深めていきたい。

（文責：倉持香苗）

【研究体制】

研究代表者	倉持 香苗	（日本社会事業大学 社会福祉学部 講師）
共同研究者	大島 千帆	（埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授）
	菊池 いづみ	（日本社会事業大学社会福祉学部 教授）
	児玉 桂子	（日本社会事業大学 名誉教授）
	菱沼 幹男	（日本社会事業大学社会福祉学部 准教授）
研究協力者	佐藤 惟	（日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科 博士後期課程）